なかゆくい

シリーズ3.

農林水産部土地改良課

昔も今もあなたの身近にある『疏水（そすい）』

「疏水」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？疏水とは、農業用水や飲料水などを確保するために、自然に手を入れて作った水路のことです。沖縄では昔から様々な疏水が作られ、大切に守られてきました。現代でも、先人のれいに習い限りある水資源を有効に利用するため、上水道や農業用水などの疏水を作っています。

今回はそのような中から、昔からある疏水と、農林水産省の「疏水百選」に認定された、「宮古用水」について紹介します。日差しが照りつける休日には是非、あなたの地域の疏水に出かけ、涼しい風を体感してみてはいかがですか？

①受水走水（うきんじゅ はいんじゅ）（南城市）

受水と走水という2つの泉から湧き出る水を利用して、昔は稲作が行われていたと言われています。穏やかな流れの受水と速やかに流れる走水の下の水田は、沖縄本島稲作発祥の地として伝えられています。

②垣花樋川（かきのはなひーじゃー）（南城市）

昭和60年に環境庁（現環境省）の全国名水百選に選ばれた井泉です。昔は樋川から流れる水を利用して、下流域で稲作が行われていました。現在でも農業用水として利用されており、また日本最南端の名水百選としても知られています。

③金武大川（うっかがー）（金武町）

金武町並里部落に位置する井泉で、大正の頃は用途別にコンクリートで仕切りを造り、飲料水や洗濯、芋洗場として利用されていました。豊富な水量は干ばつ時にも枯れることがなく、今でも稲や田芋栽培の農業用水として利用されています。

④野城泉（宮古島市）

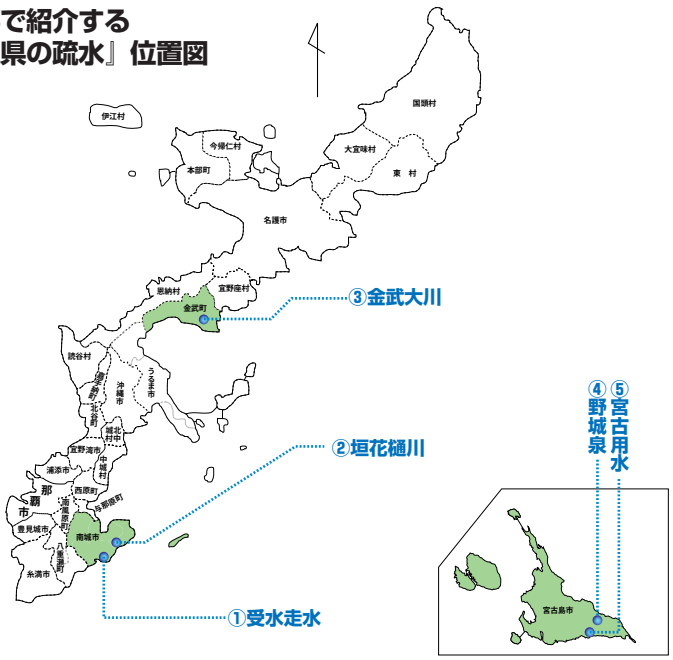
野城遺跡の南西部にある野城泉は、石灰岩台地の裾野に位置する湧水で、湧水口の周辺は切り石積み技法によって築造されています。野城遺跡は約13～14世紀頃の遺跡として知られていますが、野城泉の湧泉に切り石積みが施された年代はよくわかっていません。野城泉の水量は豊富で、今も付近の人々に利用されています。また、近年は畑地かんがい用水等としても広く活用されています。

⑤宮古用水（宮古島市）

宮古島は、地表付近の地層が水を通しやすい石灰岩で覆われ、雨が降るとそのほとんどは蒸発するか地下に浸透してしまいます。そのため雨が少ない時には、農作物に干ばつの被害が発生します。このような干ばつ被害の軽減を図るために、昭和62年度から平成12年度にかけて国内で初となる大規模な農業用水源開発を目的とした地下ダムが築造され、用水路等と併せて宮古島の畑地かんがい施設が整備されました。これらは平成18年、農林水産省の疏水百選に認定されました。（写真の建造物は福里地下ダムの水位観測施設です）

おわりに

今回紹介した、沖縄に昔からある疏水はいずれも、泉から水を引き、稲作など農業と深い関わりを持ちながら、先人達が長い間大切に維持・管理してきた施設だとわかります。それらは、飲料水や生活用水の施設として人々の生活に密着し、また美しい景観を作ってきました。

農林水産部の主催している「田んぼの生きもの調査」によって、これらの疏水に、魚やカエル、水生昆虫など、多種多様な生きものが住んでいることがわかっています。この機会に、あなたの地域の風景の中に溶け込んでいる疏水に、目を向けてみませんか？

本記事で紹介する『沖縄県の疏水』位置図